

555 径10cm以上で発見された肺癌症例の検討

東京医科大学外科

○小高達朗、奥石晴也、奥石義彦、劉榮森、坪井正博、高橋英介、沖津宏、永井完治、雨宮隆太、於保健吉、早田義博

当施設において経験した過去10年間の原発性肺癌のうち、腫瘍径10cm以上で発見された48例につき検討した。このうち切除例は14例、非切除例は34例であった。組織型は腺癌16例(切除5例、非切除11例)、扁平上皮癌18例(切除4例、非切除14例)、大細胞癌10例(切除5例、非切除5例)、小細胞癌4例(非切除4例)であった。切除例の術式は1葉切除3例、2葉切除8例、肺切除3例であった。病理病期はI期4例、II期1例、III A期7例、IV期2例であった。切除例の予後はMST12ヶ月、1年生存率56.3%、3年生存率9.4%、5年生存率9.4%であった。5年生存が認められたのはI期の低分化腺癌1例のみであった。他の症例は全て3年以内に死亡した。非切除例の臨床病期はIII A期6例、III B期5例、IV期23例であった。非切除のうち5例は未治療で早期に死亡した。他の29例には化学療法が行われ、そのうち13例には放射線療法を併用した。胸部レ線写真上PRの治療効果を認めたのは、大細胞癌と扁平上皮癌及び腺癌各1例の3例のみであった。非切除例の予後は極めて悪く、MSTが6ヶ月で、最長生存が15ヶ月であった。10cm径以上で発見された肺癌症例は進行例が多く、予後が悪く、病期I、II期で根治切除を行い得ても長期生存する例は少ない。

557 浸潤影を呈した細気管支肺胞上皮癌の検討

京都大学胸部疾患研究所 胸部外科

○平井 隆、長谷川誠紀、呉 俊雄、奥村典仁、高橋 豊、小林 淳、河原崎茂孝、水野 浩、神頭 徹、青木 稔、渡部 智、田村康一、和田洋巳、人見滋樹

細気管支肺胞上皮癌の疾患概念については議論の多いところであるが、肺癌取り扱い規約では乳頭型腺癌の1亜型とされている。本症には臨床的に種々の特徴がみられ興味深い。

胸部X線上、一葉以上を占める浸潤影を呈する細気管支肺胞上皮癌7症例を対象に検討した。性別は男性3例、女性4例で、年齢は51歳~71歳(平均59.6歳)。全例症状を認め、咳嗽7例、喀痰5例(うち1例に血痰)、呼吸困難2例、発熱、胸痛を各1例に認めた。発生部位は右下葉4例、右上葉2例、左下葉1例であった。5例は喀痰細胞診で診断し、1例は経皮肺生検で診断した。術前診断の得られなかったものは1例のみであった。Gaシンチを2例に施行し、2例とも病巣に集積を認めた。6例中4例はN2であった。臨床病期はIII A期が5例、IV期が2例と進行病変であった。低肺機能の1例を除き6例に手術を施行した。右中下切2例、右下切2例、右上切1例、左下切1例であった。6例中4例において、葉間胸膜を越えて他葉への浸潤が見られ、切除葉以外の部分切除を追加した。治癒切除の得られたものは1例のみであった。1例において経気道散布を疑わせた。

病理学的に検討し、予後についても報告する。

556 原発性肺癌にみられた空洞のX線学的検討

富山医薬大・医・1内¹、同1外²、同病理³

○小西啓子¹、水島 豊¹、矢野三郎¹、山本恵一²、龍村俊樹²、北川正信³、小泉富美朝³

(目的及び対象)原発性肺癌における空洞形成の頻度は2~6%と報告されている。今回我々は空洞形成の機序を探る目的から、原発性肺癌264例中空洞形成の認められた19例(7.2%)を対象に空洞のX線学的検討を行った。

(成績)1)空洞形成を認めた19例の組織学的内訳は、扁平上皮癌(Sq)7例(7/94)、腺癌(Ad)9例(9/109)、腺扁平上皮癌2例(2/7)、大細胞癌1例(1/12)で、小細胞癌(0/42)には空洞形成はみられなかった。2)発生部位は右肺:左肺=14:5と右肺に多く、また上葉:中葉(舌区):下葉=8:1:10と上・下葉に多く認められた。3)腫瘍内の空洞部位を中心性、偏心性、全占拠性の三つに分類すると、Sqでは偏心性、全占拠性が多く、腺癌では中心性・偏心性が多く認められた。4)空洞内壁をirregularとsmoothに分けるとその頻度は12:7とirregularが多く、Adは9例全てirregularであった。5)またirregularを乳頭状、囊胞状、鋸歯状の三つに亜分類すると、その頻度は4:1:7であった。6)空洞の最厚壁を4mm以上、以下で分類すると、肺癌では19例中18例(94.7%)が4mm以上の厚壁を有し、結核性の29例中6例(20.7%)に比し、有意であった。

(結語)空洞の性状をX線学的特徴よりいくつかの型に分類し、それと肺癌の組織型とが関連することを示した。

558 肺炎様陰影を呈した肺腺癌の検討

長崎大学第2内科¹、同第1外科²

○早田 宏¹、木下明敏¹、広瀬清人¹、谷口哲夫¹、力竹輝彦¹、鶴川陽一¹、神田哲郎¹、原 耕平¹、綾部公懿²、富田正雄²

【目的】肺外への遠隔転移を認めず、経気道転移と考えられる肺内転移を主とする肺腺癌を時に経験する。このような症例は肺炎様陰影を呈することが多いため、今回、肺炎様陰影を呈した肺腺癌の検討を行い、その臨床像を明らかにするとともに治療法についても若干の考察を行う。

【対象】昭和50年~62年までに当科で経験した肺腺癌260例中、肺炎様陰影を呈した腺癌9例(3.5%)。

【結果】入院時陰影の広がりは一側性が5例、一側多発が1例、一側単発が3例で、喀痰細胞診では5例が陽性であった。病期はI期が2例、IV期が7例で、中6例は肺内転移のみであった。肺門リンパ節転移は少なかった。手術療法の3例では残存肺に再発を生じ、全身的化学療法群でも奏功例はなかった。予後はI期39.5ヶ月、IV期(肺のみ)17.1ヶ月、IV期(肺外)5.0ヶ月であった。死因は呼吸不全が7例で、入院時低酸素血症を認めると予後は2.5ヶ月であった。

【結論】本症例では肺内転移対策が重要であり、経気道転移を防止できれば予後を改善できる可能性が考えられた。現在、我々は癌細胞の人工的経気道着床マウスを用いて抗癌剤の経気道投与を試みており、その結果についてもあわせて報告を行う予定である。